文字・表記（理論・現代）

笹原宏之

1　はじめに

近代を含めた現代の日本語の文字・表記に関する調査研究や理論的な研究の成果は近年その数を増しており，国立国語研究所の図書館や情報資料研究部ほかの助力を得ながら目睹した，2年間に発表された単行本，論文その他は200点を超えた。本稿においては，紙幅の許す限りそれらにより学界の動向を概観し，今後の展望を述べる。

2　文字・表記の総論

小松英雄『日本語書記史原論』（笠間書院，1998.6）は，書記は情報の蓄蔵であり，言語は情報を蓄蔵する媒体であるとの観点に立ち，文字・表記の展開について論証する。現代を含む文字史としては，杉本つとむの諸論考を収めた『日本文字史の研究』（八坂書房，1998.10）も刊行された。矢田勉「印刷時代における国語書記史の原理」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』，1998.2）は濁点や句読点，括弧などの表記符号が整版印刷，活版印刷，原稿用紙により文字体系と同価値化されてきたことを説く。西崎亨「活字と肉筆――『坊ちゃん』の「原稿」と「初出本」と「初版本」と――」（『武庫川女子大学言語文化研究所年報』10,1999.6）も原稿の表記や用字，字体に関わる異同が活字化という印刷工程に起因するとし，書記の観点からテクストの扱い方の問題点を示す。

金田一秀穂「音と文字の言語行動と意味――意味のない言葉の分析にむけて――」（『杏林大学外国語学部紀要』11,1999.3）は日本語の文字や表記についての新たな視点と意義を鮮明に説く。漢字の種類と含有率については，Akio Tanaka「The Number of Kanji in Modern Japanese Writing」（『Journal of Quantitative Linguistics』5-1・2,1998.5）が明治以後を概観する。伊藤雅光「構造字彙論」（『国語と国文学』，1999.5）は「字彙」を定義し，実証のための理論を展開する。今期は雑誌において文字に関する特集が多く組まれ，『国語と国文学』76-5（1999.5）の「文字」では各論考に文字研究の成果が示されている。シンポジウムや研究発表会等も催され，国立国語研究所においては「文字・表記研究会」が開催され(1998.3,1999.3)，専門用語研究会・情報知識学会により「文字シンポジウム」(1998.11)が行われた。インターネット上のホームページに池田証寿や大原望のように成果を典拠とともに公開するものがあるほか，CD-ROMなどのメディアも用いられた。池田は

「諸橋轍次編『大漢和辞典』の音義未詳字」(『古辞書と JIS 漢字』1,1999.3),「諸橋大漢和の譌字」(同) などにより「康熙字典体」や漢和辞典の位置付けに再考を促すほか,後述のように具体性に富む研究成果を次々と発表した。字書類に関する資料研究としては前田富祺「言語文化史から見た『明治字典』――国語辞書史序論として――」(『語文』73,1999.10) が言語文化史的な観点で字書史を見直す必要性を説く。

表記に関しては,土屋信一「表記」(『国文学　解釈と鑑賞』64-7,1999.7) がその変化を概説する。劉玲「太宰治『人間失格』における漢字表記「人」と仮名表記「ひと」の使い分け」(福井大学『国語国文学』37,1999.3) は作品中で特定の人物を指すか否かで平仮名表記と漢字表記が使い分けられる傾向を指摘する。速記については,清水康行「速記は「言語を直写」し得たか――若林玵蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性――」(岩波書店『文学』9-1,1998.1) が速記符号の表音性に疑問を呈示し,語彙的な点からも注目される。この事実は,兼子次生『速記と情報社会　古代ローマから 21 世紀へ』(中央公論新社,1999.5) にもうかがえる。

3　漢字

3.1　漢字・字種

阿久津智「漢字圏と非漢字圏」(『拓殖大学日本語紀要』9,1999.3) は「漢字 (文化) 圏」という語と概念についてまとめる。野村雅昭「字音形態素考」(『国語と国文学』,1999.5) は漢字を「表形態素文字」として位置付け,「漢字語」という術語に対する疑問を示す。杉本つとむは「術語,〈漢字語〉を提唱する」(『解釈』44-9･10,1998.10) において,「日本漢字」の構造と本質を透視できるように漢字で表記されてきた日本語に対し「漢字語」を術語として提案する。日本製漢字のたぐいとしての「国字」については,佐藤稔「擬似漢字 (国字) 小論」(『国語と国文学』,1999.5) が豊富かつ説得的な具体例を示しながら漢字と各種の擬似漢字の性質を明らかにし,現代の文字とのつながりを説く。何華珍「《中華字海》中“日本漢字”釈義商兌」(『漢字文化』37,1998.2) は中国の『中華字海』における誤解を指摘する。

現在,使用字種は「常用漢字表」やワープロの影響を強く受けているが,それらが調査対象となることは少ない。新美明夫「課題レポートの評価と学生に対する印象形成に及ぼすワープロ文字の効果――手書きのレポートとワープロで印刷されたレポートとの比較――」(『愛知淑徳短期大学研究紀要』37,1998.7) はワープロによる文書が印象を高めることを示し,平井洋子「ワープロ使用は漢字書字能力を衰えさせるか」(『人文学報』297,1999.3) は文字生活を見据えた予備調査であり,詳しい報告が待たれる。當山日出夫「ワープロ辞書の現在と将来――ATOK と MSIME の漢字辞書の問題点――」(『日本語学』17-14,1998.12) はワープロ内蔵辞書の調査である。近年の文献に関して,岩淵匡「表外字使用に見られる一現象について」(『早稲田日本語研究』7,1999.3) は印刷物の常用漢字表外字の使用実態について時代

差や位相差を指摘する。安岡孝一・安岡素子「新潮文庫にみる大漢和にない漢字」（『京都大学大型計算機センター第59回研究セミナー報告』，1998.3）はCD-ROM版『明治の文豪』等における漢和辞典にない漢字・国字を指摘するが，今後は電子化資料の位置付けが必要である。

新聞の漢字については，佐竹秀雄「新聞社会面記事の語彙と漢字――1997年の新聞3紙を資料として――」（『武庫川女子大学言語文化研究所年報』9,1998.6）が複数紙にわたる調査である。久野雅樹・横山詔一・野崎浩成「毎日新聞における漢字使用頻度の月次変動」（『計量国語学』21-7,1998.12）は漢字の使用が時期によって変動するという観点による大量の電子化記事の分析として注目される。横山詔一・笹原宏之・野崎浩成・エリク=ロング『新聞電子メディアの漢字　朝日新聞CD-ROMによる漢字頻度表』（国立国語研究所プロジェクト選書1　三省堂，1998.7）は電子メディアと紙面との相違点を示すが，字体などについて紙面との照合をさらに要する。これに対する豊島正之「書評」（『日本語科学』6　国立国語研究所，1999.10）は文字の電子化を考える上で示唆に富み，笹原宏之・横山詔一・野崎浩成・米田純子「『朝日新聞』のCD-ROMと紙面における幽霊文字と辞書非掲載字――「JIS X 0208」の漢字を中心に――」（『計量国語学』21-4,1998.3）は電子化データの性質と資料的な価値を記す。雑誌については佐竹秀雄「文字・表記の調査」（『日本語学』17-10,1998.9）が大量調査の意義と限界を指摘する。明治期の総合雑誌の本文1年分を扱う木村睦子・田中牧郎・飯島満ほか『『太陽』コーパスの漢字処理――『太陽』1901の漢字調査――』（1999.2）はJIS漢字による電子化の実践と調査である。

3.2　字音・字訓・用法

現代の漢字音については，日本語教育にかかわる対照研究や語彙論的，音韻論的な研究があったほか，いわゆる慣用音についてまとまったものに佐藤宣男「教育漢字における慣用音」（『福島大学教育学部論集人文科学部門』64,1998.6），若松由美「日本漢字音における慣用音の研究」（『言語科学研究』5,1999.3）がある。字訓に関しては佐藤喜代治『漢語漢字の研究』（明治書院，1998.5）に豊富な用例に基づく所説に近代に及ぶ箇所がある。字義に関しては前田富祺「字義構造について」（『国語文字史の研究』4　和泉書院，1998.8）が字義構造を設定することによる漢字の体系化の可能性を示す。

固有名詞には全数調査により国語史や方言の研究に寄与する部分があるが，その文字・表記についての論著には検証が不可能な部分が見られた。地名の漢字と表記の資料として，金井弘夫『地図で見る『日本地名索引』』（CD-ROM版　アボック社，1998）は読み情報などに課題を残すものの参考となる労作である。池田証寿「地名の漢字をインターネットで検索する」（『国語国文研究』113,1999.10）は多様な用例をもつ「厖大な文書」であるインターネット上の電子テキストの検索という方法を用いてJIS漢字の使用実績を検討する。池田は書籍の題名に関しても「『補訂版国書総目録』の漢字」（『古辞書とJIS

漢字』2,1999.10）に実例を豊富に示しつつ扱い，漢和辞典を重視する方向に注意を促す。

3.3 漢字表記

漢字表記に関しては，佐藤喜代治(前掲)，京極興一『近代日本語の研究――表記と表現――』(東宛社，1998.5）が扱うほか，「大抵」の定着過程を綿密に追った田島優「[たいてい]をめぐって――表記における規範意識と実態を導入として――」(『説林』46,1998.3）がある。田島の一連の詳細な研究は『近代漢字表記語の研究』(和泉書院，1998.11）にまとめられた。近藤明「芥川龍之介の「ジョウダン」表記――「冗談」から「常談」へ――」(『解釈』44-1,1998.1）は芥川の表記の変化を規範意識の高まりによるととらえる。いわゆる当て字については中国に生まれた音訳表記の来歴を追う陳力衛「三鞭酒・シャンパン・香檳酒」(『しにか』,1999.6)，明治初期の外国地名の当て字の一つの実態を示す白淑敏「明治初期地理書における地名音訳漢字表記――『輿地誌略』を資料として――」(『国文鶴見』34,1999.12）に，調査が及んでいない資料と表記の多いことが察せられよう。

3.4 漢字の字体・字形・書体

文字の字体や字形についての研究は，文字言語を構成する要素に対する研究であり，また文字の受容の心的過程や書記行為にかかわる研究と見ることもできる。佐藤栄作「漢字字体とは何か」(『日本語学』17-12,1998.10）は「潜在字体」「個人字体」などの概念を用いた論を展開し，字形レベルの字体への組み入れ傾向を指摘するなど示唆に富む。佐藤はほかにも「「誤形字」を考える――字体研究と文字教育をつなぐために――」(『愛媛国文と教育』31,1998.7)，「草書・草化と字体」(『国語と国文学』，1999.5）などで書体・字体・字形について考察を進展させている。岩淵匡「通時的考察における漢字字体の扱いについて」(『日本語研究と日本語教育』明治書院，1999.11)は漢字使用史をとらえる際の字体の取り扱いについて諸問題を指摘する。池田証寿「徒然草百三十六段の一解釈――漢字使用の実態と漢字字体規範意識とのずれ――」(『国語と国文学』，1999.5）は日本の字体の史実をメディアと規範意識から探り，JIS 漢字を用いる現代でも同様の研究が有益であると記す。笹原宏之「「龍」「竜」にみる字体の併用の実態とその原因――歴史・メディア・用法・意識・行動の各面から――」(『国語学研究と資料』23,1999.12）は字体レベルの各種の頻度データの採集と利用の試み。活字総数見本帳などに現れた印刷字形の実態が概観できる文化庁文化部国語課『明朝体活字字形一覧――1820 年～1946 年――』(大蔵省印刷局，1999）は字体・字形の研究に有用である。

近藤公久・天野成昭『日本語の語彙特性』(三省堂，1999.12）は漢字の親密度，複雑度などのデータを含み，緻密な分析が待たれる。梅田三千雄「部首情報を手掛かりとして確定できる単語の定量的分析」(『計量国語学』21-5,1998.6）は偏や旁が認識されると多くの単語が推定できると説く。字形について書道の方面では，内藤仁之・小川美帆・押木秀樹「手書き文字の概形特徴に関する基礎的研究」(『書写書道教育研究』13,1999.3）が手

書き字形は概形が異なった方が視認性の高まることを明らかにする。字形の生成と造型に関わる筆順については，分析方法を提案する礒野美佳「『筆順指導の手びき』を対象とした筆順構造の分析」（同）などがあったが，論文数が少なかった。

常用漢字の表外字は後述する文字コード問題と関連し，国語審議会においてその字体に関して検討が行われ，樺島忠夫「標準漢字字体表試案とは何か」（『しにか』特集「日本の漢字を考える」，1999.6）などのほか，小林一仁「漢字の「字体」を考える」（同）があり，異体字を同一の字種として判断できる文字知識を「渡り」ととらえる。文化庁文化部国語課『国語に関する世論調査』（大蔵省印刷局，1999.4）は字体に対する主観頻度などを計測する。最上勝也「「鴎外」か「鷗外」か～表外漢字字体とマスコミ～」（『放送研究と調査』,1998.10）は「二重基準」への意見である。笹原宏之・横山詔一「異体字選択に影響する要因」（『計量国語学』21-7,1998.12）は漢字字体に対する好みの要因はなじみであり，その背景に目にする頻度があることを示し，同「漢字字体に対する大学生の接触頻度」（『計量国語学』22-2,1999.9）は言語生活の一角を占める文字生活の実態を探る試みだが，全体の傾向を捉えるには大規模な調査を要する。

書体・フォントに関しては押木秀樹「現代における行書の意義と解釈」（『上越教育大学国語研究』12,1998.2）があり，礒野美佳・五十嵐啓一・押木秀樹「教科書体フォントの状況及び小学生用コンピュータへの同フォント導入の必要性について」（同）は教科書体の実態をとらえ，字形とデザインの問題を指摘する。猿田和樹・渡辺洋一「悪筆文字の認識――人間とニューラルネットワークとの比較――」（『山形大学紀要人文科学』14-2,1999.1）は人間が読めてOCRが読めないパターンなどを挙げ，人間と機械との文字のとらえ方の違いをうかがわせる。これらの方面も文字・言語研究の対象となるならば調査の余地は大きい。

4 仮名

字体・字形に関しては，飯田透「平仮名の字形についての一考察」（『東京大学留学生センター紀要』8,1998.3）が平仮名の字形が流動的で字形上の問題点を的確に指摘することが難しいと推測するように，漢字に比して研究が少ない。矢田勉「「平仮名らしさ」の基準について――オの仮名を例として――」（『国語と国文学』，1999.5）は近現代の書記のありかたと文字意識に触れ，小書きに関しては阿久津智「仮名の小書きについて」（『立教大学日本語研究』6,1999.3）が活字印刷や機械処理の影響を指摘する。表記については京極興一（前掲）が近代の交ぜ書き，振り仮名と仮名遣い等に関して分析を示す。

片仮名については，その運用の実態と原因に関する意欲的な調査が盛んに行われた。金城ふみ子はローマ字表記とともに「「大学広告」におけるカタカナ表記語及びアルファベット表記語の使用状況」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10,1998.3），「ファッション雑誌「zyappu」14号における総ローマ字表記の試み――21世紀前夜の文字改革の流れの中で――」（『東京国際大学論叢経済学部編』18,1998.3），「TIU新入生配付資料におけるカタカ

ナ表記語使用の実態分析」(同19,1998.9)に詳しく調査結果を示す。中山惠利子「非外来語の片仮名表記」(『日本語教育』96,1998.3)は新聞における和語・漢語の片仮名表記の分析であり，柴田真美「現代のカタカナ表記について」(『国語国文学会誌』41,1998.3)も続稿が期待される。玉岡賀津雄・初塚眞喜子・ジョセフ＝F＝ケス・デビット＝R＝ボグダン「ひらがな対カタカナ――語彙および擬似語の処理における表記の親近性効果――」(『読書科学』42-1,1998.4)は心理学的な調査研究である。

送り仮名については，送り仮名を法則化することの難しさを示す野村雅昭「「送り仮名の付け方」の意味するもの」(『しにか』,1999.6)のほか，明治初期の小説，啓蒙書，教科書の実態を示す久保田篤「明治初期の送り仮名」(『成蹊大学文学部紀要』33,1998.3)，通時的な変化をたどった廣岡理栄「送り仮名の変化」(『国文学　解釈と鑑賞』64-7,1999.7)が見られた。傍訓(ルビ)に関しては論考が多く，かねこ・ひさかず「日本語と漢字問題(一)――ふりがな問題について――」(『国文学　解釈と鑑賞』64-1,1999.1)，土屋礼子「ふりがな論の視座　近代日本における文字とリテラシイ」(『現代思想』26-10,1998.8)，黒木和人「「ふりがな廃止論」の理念と実践――山本有三の改版作業から――」(『言語科学論集』2,1998.11)のほか明治初期の一実態を示す木村秀次「「西洋聞見録」の振り仮名」(『文学・語学』165,1999.10)があった。仲矢信介「1938年(昭和13年)ルビ禁止政策成立過程について」(『国語学会平成11年度春季大会要旨集』,1999.5)は闇に埋もれた部分の多いことを示す。文字生活への影響が大きい施策の背景に関する調査は他にも数点見られたが，その正確な把握には当時の国内外の動向について総合的な視野も必要である。

5　補助符号

補助符号については前述分を除き，まとまった研究が少ない。鉤括弧類には藤田保幸「書記テキストにおける引用マーカーとしてのカギカッコの用法――池波正太郎「剣客商売」を例として――」(『国語文字史の研究』4，和泉書院，1998.8)に考察があり，句読点には大類雅敏「句点と読点」(『表記』17 小特集「句読点」，1998.7)があった。宗像和重「制度としての原稿用紙――その予備的考察――」(『文学』9-1,1998.1)は原稿用紙の升目が句読表記の可能性を開いたと説く。今期は，前にも触れたように同様の指摘が目をひいた。

6　文字の認知

心理学(認知科学)の方面においては，ここまで引用してきた通り文字・表記について多くのアプローチがなされている。Joseph F. Kess・Tadao Miyamoto『The Japanese Mental Lexicon Psycholinguistic Studies of Kana and Kanji processing』(John Benjamins Publishing Co., 1999)，林龍平『日本語の単語認知における表記差効果』(風間書房，1999.2)は現在までの研究の水準を示す。齋藤洋典「マルチメディアと通信を利用した日本語学習支援ツールの開発」(1998.3，科学研究費研究成果報告書)は漢字を構成す

る「部品」，漢字の構造化に関する研究を含む。桑原陽子「漢字の形態によるイメージについての調査」（『広島大学日本語教育学科紀要』8,1998.3）は被調査者数を増やせば明確な結果が得られるであろう。そのほか，新プロ「日本語」研究班3・文字言語チーム『日本語表記に関する認知科学と心理言語学の融合研究』（1999.3），横山詔一ほか「文字・図形の認知――字体と感性――」（『日本語学』18-8,1999.8）などがあった。文字・表記は主体的な運用（産出・送信）と受容が，心理的・生理的作用や心的辞書と深く関わっており，文字生活を営む人間の研究と言語研究とは相互に貢献が求められるものであろう。

7 文字の教育

月崎美智子「日本語教育における文字分野研究の動向と課題」（『書写書道教育研究』12,1998.3）は，文法・音声などに比して字体・字形の原理研究の乏しいこと，日本語教育と国語学，書写教育との連携の弱いことを指摘する。『日本語学』17-5特集「学校教育の漢字」（1998.4）が小林一仁「中学校での常用漢字学習の課題」，氏原基余司「教科書体と明朝体の問題――教科書体の字形統一を中心として――」などを載せるほか，石川真奈見に「基本語彙の表記のための漢字とそのヨミ」（『国語国文論集』27,1998.3），明治初期の基本漢字に関する「福沢諭吉の基本漢字観――『文字之教』『学問ノスヽメ』を資料として――」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43-3,1998.2）がある。

学校教科書については，清野隆「小学校国語教科書の表記について――振り仮名表記・交ぜ書き表記を中心に――」（『語学文学』37,1999.3）に調査があり，京極興一（前掲）も交ぜ書きを扱うほか，JIS第3水準・第4水準『JIS X 0213：1999』（1999.1）を策定した符号化文字集合調査研究委員会は教科書約1500冊や新聞，文学作品，固有名詞，辞書などからJIS外の漢字・仮名・符号を採取し，典拠や用例に関するデータベースを作成し，一部を公開した。兒島慶治『香港・日本漢字字体対照表』（向日葵出版社，1999.6）は字体を対照させた労作である。

8 文字の電子化

各国で現代に至る諸分野の文字資料の電子化が進み，文字コードことに漢字コードに関する調査研究が諸方面で活発に行われた。豊島正之は「符号化漢字集合の策定に於ける情報の共有」（『第4回 シンポジウム コンピュータと国文学講演集』，1999.10）などにおいて漢字の史的観点を交え，文字の情報交換という機能を重視した鋭い論を展開する。また池田証寿「新旧分離字と新旧包摂字――JIS漢字の所拠漢字表と包摂規準――」（『訓点語と訓点資料』1998.3）は20年前にJIS漢字が作られた経緯と背景を解き明かす。池田編『古辞書とJIS漢字』は森下留美子「行政情報処理用基本漢字に関する研究」（1,1999.3），笹原宏之「転写に伴う漢字字体の変化――「JIS第1水準・第2水準」制定作業の再現――」（2,1999.10）やJIS外字に関する成果などを含む刊行物である。ほかに，當山日出夫「コンピュータの文

字に対する意識について――錯綜するJIS漢字論の根底にあるもの――」(『国語と国文学』, 1999.5), 芝野耕司「JIS批判に応えて」(『『文字コード』日本語の文字と組版を考える会講演論文集』, 1998.3) などがあり, 電子化資料における字体や字種に関しては小池和夫・府川充男・直井靖・永瀬唯『漢字問題と文字コード』(太田出版, 1999.10) に詳しい論考が見られる。

斎藤秀紀は「漢字の属性情報に対する符号化法の提案」(『計量国語学』21-4,1998.3) 等で漢字データベースの一つの可能性を示す。小林龍生「要求する側の責任ということについて」(『電脳文化と漢字のゆくえ　岐路に立つ日本語』平凡社編, 1998.1) は翻字・翻刻の意味を考えさせ, 飯島満・大塚みさ「近代活字文献の電子テキストにおける字形の整理――JIS包摂規準の活用と提案――」(語彙・辞書研究会, 1998.12) は包摂規準の運用上の利点と問題点を指摘する。漢字をフォント化し, 種々の検索を可能とした「今昔文字鏡」(エーアイ・ネット・紀伊國屋書店, 1999) は改訂版が刊行され,「超漢字」「eKanji」「GT書体フォント」なども展開を見せた。すぐれた道具は漢字研究を進展させるであろうが, 字というものの単位の再考など文字研究への課題が残る。

9　おわりに

今期も一部に「字形」「書体」「表記」などの用語の混乱や, 使用テキストを明記しないもの, 記述に「常用漢字表」の字数や文献の発行年を誤るような基本的な事実の誤認があった。また, 大量のデータを処理するケースが増えているが, 1例ごとに検討すると扱われた文字・表記に誤解に基づくと思われる記載も見られた。

日本の文字・表記は位相, 筆記素材, 媒体ごとに, 時代とともに資料を拡大している。研究者自身が過ごす時代の事象であっても内省, 観察しえないことは多く, 新しい世紀には, 文字・表記に関する多様な現実に対して情報を集積し, 的確な切り口を見極めた調査研究を進めていくことが必要であろう。

――国立国語研究所主任研究官――